

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 1 日現在

機関番号：12102

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2013～2014

課題番号：25884008

研究課題名(和文)近代ドイツにおける細菌学を通じた衛生観念の変容に関する研究

研究課題名(英文) A Study on Transformation of Modern German Hygiene through the Emergence of Bacteriology

研究代表者

村上 宏昭 (MURAKAMI, Hiroaki)

筑波大学・人文社会系・助教

研究者番号：70706952

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：昨年度に引き続き、平成26年度も衛生博覧会運動に照準を絞って近代ドイツ社会における細菌論の普及過程について研究した。その際、19世紀の博覧会にまで遡り、細菌論が定着する以前の展示の特徴についても考察の射程を広げ、その成果を論文「コッホ細菌学と衛生博覧会」(『史境』第68号、2014年)として公表した。また、その後はドイツ第二帝政期における最大規模の国際衛生博覧会であるドレスデン国際衛生博覧会(1911年)を考察の対象とし、その中間報告として「ドレスデン国際衛生博覧会に見る細菌論の啓蒙戦略」と題して第35回歴史・人類学会(於・筑波大学)で発表を行った。

研究成果の概要(英文)：Just as last year I considered continuously with the example of hygiene exhibitions, how the bacteriological knowledge spread in the German imperial society. Thereby I went back to one exhibition held in the 1880s in order to put the problem in the broader perspective and published as its result a monograph "Koch's bacteriology and the hygiene exhibitions: An introduction to the history of German hygiene movement" (Shisen, vol. 68, 2014).

Then I put up the Dresden Internatinal Hygiene Exhibition in 1911, which is well known as the largest exhibition during the German imperial era, as the object of consideration and reported its interim outcome under the title "The enlightenment strategy of bacteriology in the Dresden international hygiene exhibition" (held on the conference for history and anthropology at the University of Tsukuba).

研究分野：ドイツ近現代史

キーワード：公衆衛生

1. 研究開始当初の背景

研究の背景、すなわち近代的な細菌学説を通じてドイツ社会の衛生観念が変容していくプロセスを解明しようとする本研究に関わる国内外の研究動向としては、大きく分けて以下の三つの潮流に分類することができる。

(1) 専門知の権力論：1970年代以降の専門家権力に対する批判的風潮を背景に、公衆衛生における医療専門家の制度的・知的権力ないしその生成過程を分析したもの。

(2) ナチズム問題：上記(1)と呼応しつつ、専門知に依拠する衛生政策とナチズムによる合理的絶滅政策との親和性を問題視した、いわゆる「近代の病理」論に連なるもの。

(3) 細菌学のメディア論：前世紀転換期に見られた「科学的知の大衆化」という歴史的文脈を背景としながら、不可視の細菌の可視化技術(顕微鏡や染色)に随伴する「メディア性」(=病原体の実在を宣伝する効果)に着目するもの。

しかしこれら(1)~(3)の諸潮流に共通する特徴としては、もっぱら専門家集団の理論的・実践的行動に視野を限定し、もって衛生学的知の「生産」局面に分析を集中するという傾向が強く見られる。そのためこれらの研究では、衛生学における瘴気論から細菌論への転換が社会的次元でいかに受容されていたのか、という点はほとんど解明されていない。それに対して本研究が重点を置くのは、おもに衛生博覧会を通じた知の「流通」と「消費」の局面である。つまり専門家の次元だけでなく、もっと包括的に衛生をめぐる社会一般の思考様式を析出することが本研究では肝要となる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、19世紀末に細菌学が確立して以降、ヨーロッパ社会の衛生観念がいかなる変化を遂げたのか、その過程を歴史的に追跡することにある。18世紀末に都市環境を浄化しようとする欲望がヨーロッパ社会で芽生えた時、不浄の象徴としてまず嫌悪と恐怖の対象となったのは悪臭であった。そこから嗅覚が身体健康を蝕む病原の探知器として五感の中で特権的地位を与えられ、都市の衛生対策でも悪臭として現前化する瘴気の除去がもっぱら中心的な課題となった。

しかし19世紀末になってパストゥールやコッホに代表される近代細菌学が登場し、人間の身体器官では知覚不可能な細菌が病原体と位置づけられたことで、衛生をめぐる社会の感性は大きな変容を余儀なくされたと推察される。人びとはいかにして、五感で感知できない存在者を病原体と同定する思考を受容していったのか、またそうした受容はその後の衛生活動にいかなる帰結をもたら

したのか。これらの問いに対する回答を提示することが本研究の課題となる。

3. 研究の方法

上の「研究目的」を達成するため、本研究では前世紀転換期のドイツで花開いた衛生博覧会に着目し、その活動内容を精査するというアプローチ法を採った。というのは、公衆衛生に関する限り、上記のように衛生学的知の生産局面については既に研究の蓄積があるものの、衛生博覧会など「啓蒙」の側面に関する研究はほとんど進んでいないからである。本研究の特色は、まさにこうした博覧会活動を通じた衛生学的知の流通と消費の局面に光を当てる点にある。

当時の社会で博覧会というイベントが産業広告や大衆啓蒙のための一大メディアであったことを鑑みれば、前世紀転換期に繰り返し開催された衛生博覧会も少なからぬ歴史的意義を持つはずであろう。本研究の特色は、まさにこうした博覧会活動を通じた衛生学的知の流通と消費の局面に光を当てる点にある。

現にドイツでは1911年のドレスデン国際衛生博覧会を皮切りに、1930年代に至るまで大規模な衛生博覧会が繰り返し開催されている。そのうち最も代表的なものとしては、1911年のドレスデン博覧会に加え、1926年にデュッセルドルフで開かれた「健康増進・社会扶助・体育のための大博覧会」(通称「ゲゾライ」Gesolei)と、1930年に再びドレスデンで開催された国際衛生博覧会が挙げられる。

本研究ではおもにこれら三つの衛生博覧会を中心に据えて、細菌論に基づく衛生学的知の「流通」と「消費」の歴史的位相を解明することを目指した。具体的には、まず流通の局面では、衛生博覧会を舞台とした衛生学(科学)の論理と企業(経営)の論理との衝突ないし融合のダイナミズムに焦点を当て、次いで消費の局面では、専門家自身によって通俗化された知と一般社会の通念との齟齬、ならびに前者との接触を通じた後者の変容の様態を浮き彫りにしようとした。

4. 研究成果

研究期間内に公表できた研究成果の内容は、以下のとおりである。

(1) まず、「5. 主な研究論文等」の〔雑誌論文〕において、19世紀後半から20世紀初頭にいたるまでのドイツの衛生博覧会活動について考察した。衛生博覧会というイベント方式は、既に19世紀半ばには西欧を中心に開催されていたが、医学・衛生学研究の権威がドイツにシフトするとともに、衛生学による民衆啓蒙運動の中心地もドイツに

置かれるようになっていった。そこで本論文では、コッホ細菌学の確立以降、ドイツ国内で衛生博覧会がどのような展開を辿ったのかを、瘴気論と病原体論との対立という観点から考察し、その結果として以下の知見を得ることができた。

まず科学者共同体内部において、細菌学の黎明期では、パストゥールが微生物の形姿の再現ではなくその機能の発現形態に応じて病原体を分類していたように、病原体の存在証明の手続きには多様な方式が存在していた。しかしコッホによる細菌学の確立以降、そうした細菌の存在を実証するための手続きには、顕微鏡写真を用いた病原体の視覚的再現のみが妥当なものとなるようになった。また、コッホにとってこの顕微鏡写真は、ネガさえあれば人・時・場所の制約を越えて誰もが同じ対象を認識できる限りで、個人の恣意的動作による認識のブレを免れない顕微鏡そのものより認識価値が高いものであった。

とはいえ 1883 年のドイツ初の衛生博「全ドイツ衛生・救命博覧会」のように、民衆啓蒙運動の次元では、細菌学という新たな知の編成がすぐさま反映されたわけではなく、19 世紀末にいたるまで旧来の瘴気論といわば拮抗した形で展示が行われており、この段階では「不可視の病原体」に対する恐怖の煽動はまだそれほど前面には押し出されてはいなかった。

病原体論が初めて展示の中核を形成したといえるのは、1903 年のドレスデン都市博覧会における特別展「国民病とその撲滅」である。ここではコッホ細菌学の実証手続きに倣って、細菌の姿を撮影した標本写真が展示の場に持ち込まれ、顕微鏡という実験器具そのものも一つの展示品として設置されていた。ただしこの啓蒙の場においては、顕微鏡写真はもはやコッホが期待したような高い認識価値を有するものとは見なされず、むしろ顕微鏡が見せる微小の世界にこそ民衆教化のための最高の価値が見出されていた。これは、顕微鏡が実験室という研究空間から引き離され、博覧会という、研究空間とはまったく異なるロジックが支配する場に置き直されたことによる。すなわち顕微鏡は、その用途が実験研究という活動にほぼ限定された器具であるだけに、民衆啓蒙の場ではかえって汎用性の高い写真よりも科学のシンボルとして適合的となり、結果としてある種のアウラをまとうことになったのである。

(2) 次に〔学会発表〕において、ドイツ衛生運動史上に名高いドレスデン国際衛生博覧会(1911 年)を考察した。上に述べた衛生学者の博覧会活動の成果もあつてか、20 世紀初頭にはドイツ社会でも細菌学説が比較的広く知られていたことが、種々の史料から確認できる。しかしそれにもかかわらず、ドイツではまさにこの時期に史上空前の規模

で衛生博覧会が開催されている。その理由も含めて当該国際衛生博を立ち上げて分析した結果、以下の知見を得ることができた。

まず、民衆の想像する細菌の形象が現実のものからあまりに乖離した異界の怪物ばかりであったこと。これは確かに当時の病原体を描いた種々の画像史料からも確認できる。こうした誤ったイメージによって、民衆の間で病原体に対する過剰な恐慌が引き起こされ、その反動として細菌学説の信頼が失墜することを恐れた衛生学者は、改めて大規模な啓蒙活動の必要性を痛感していく。これが、細菌学説が普及し始めた時期にドレスデン国際衛生博覧会が開催された背景である。

またその展示内容も、より視覚的に理解できる形に創意工夫が凝らされていた。たとえば、顕微鏡標本だけでなく細菌が付着した物体を数百倍に拡大した模型や、具体的な日常風景を描いた想像図で病原体の感染経路を図示することで、日常空間に病原体が充満していることを繰り返し強調した展示となっている。これは既に、疾病現象の局在性を前提とする瘴気論と完全に決別した展示内容といえる。すなわち、病原の「局在性」から「遍在性」へという発想の根本的転換を促す展示内容となっている。

しかし当時の民衆側での当該衛生博覧会の受け止め方は、当然ながら主催者側とは多かれ少なかれずれを見せている。むしろ、当時の市民層向けの家庭雑誌に目を通せば、当該博覧会において細菌論に偏った展示内容に対する不満の声が上がっており、旧来型の瘴気論を支持する心性が根強く残存していたことが窺える。ここから、博覧会形式にもとづく民衆啓蒙運動だけでは、疫病に関する社会全体の心性を転換させることはできなかったこと、むしろ細菌学説が社会のなかで完全に定着するまでには、なお複雑なプロセスを経る必要があったこと、少なくとも以上の二点を仮定することができる。

以上の成果から、疫学・衛生学研究のいわゆる病原体論は、パストゥールやコッホによる細菌学の体系化によってすぐさま社会全体にその理論が普及・定着したわけではない、ということが分かる。いいかえれば、今日の社会で広く浸透している細菌やウイルスなど「不可視の敵」に対する不安感、あるいはそうした不安にもとづく潔癖症的な洗浄強迫の心性は、コッホやパストゥールの病原体学説を直接のきっかけとして社会に広まったわけではないのである。その意味で、巷間に言われるいわゆる「パストゥール革命」(パストゥールの学説によってヨーロッパ社会の衛生観念が急激に変革されたという事態を指す)なるものは、後年になって回顧的に構成された神話にすぎない可能性が高い。

では細菌学説は、具体的には一体どのような歴史的事情を背景に、いかなるプロセスを経て定着していったのか、またそれが最終的

に瘴気論を社会から駆逐できたのはいかなる事情によっていたのか。本研究の成果からは、こうした問題が改めて浮き彫りになった。これらの問題を解決することが、今後の研究の課題となる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1件)

村上 宏昭、コッホ細菌学と衛生博覧会：ドイツ衛生運動史序説、史境、査読有、第68号、2014年、33 - 52

〔学会発表〕(計 1件)

村上 宏昭、ドレスデン国際衛生博覧会(1911年)に見る細菌論の啓蒙戦略、歴史・人類学会第35回大会(於：筑波大学東京キャンパス(東京都文京区))、2014年11月16日

6. 研究組織

(1)研究代表者

村上 宏昭 (MURAKAMI, Hiroaki)

筑波大学・人文社会系・助教

研究者番号：70706952